ISSN 0289-8144

なきごえ

1994

8

OSAKA 咲 AKASO

大阪市
天王寺動物園協会

なきごえ
8
1994

（撮影：長瀬　健二郎）

2 —— New Face　コアラが入園しました（長瀬健二郎）
3 —— 動物と私　ライオンの赤ちゃんが池にボチャン！（根本　進）
カバーウォッチング　マナヅル
4 —— アフリカで考えたこと（本間令香）
6 —— 鳥の楽園（バードケージ）における過去7年間の繁殖成績（村上勇一）
8 —— グラフZOO　コアラのムコ入り（大野尊信）
10 —— キーパーズアイ　（早川　篤）
11 —— ZOO DIARY

カバーウォッチング

マナヅル

ツル目　ツル科

Grus vipio

モンゴル北東部から中国東北地方、アムール川の中流域で繁殖し、朝鮮半島南部、中国の長江下流域、鹿児島県出水市などで越冬します。出水市には毎年1,000羽以上飛来します。

（撮影：堀内智生）

動物と私

ライオンの赤ちゃんが池にボチャン！

東京から大阪に行くのは本当に近くなっています。それなのに動物園見物が好きな私は天王寺動物園へずいぶん御無沙汰してしまいました。

キーウィが来たばかりの頃、まだ狭い仮小屋に入っていたのを、そっとのぞかせて頂き、とても嬉しかったことは、よく思い出しますが、あれは何年前のことだったでしょうか。

今年の3月久し振りに天王寺動物園へ出かけて、正面付近の様子や、バードハウス等が素敵に近代的になっていることや、コアラ舎が立派になっていることなど、改めてとても新鮮な気持で園内を一巡させて頂きました。

その頃はホッキョクグマの誕生がビッグニュースで、なんともほほえましい親子の姿が眺められて、幸せでした。飼育係の大東孝司さんにもお会いできて、立ち話でしたがホッとされた心境をお聞きしましたが、産室の用意や、暗い部屋で絶食中の母親の状況をあれこれ心配したり、赤ん坊の声にきき耳をすましたり、赤ちゃんがプールへ落ちた時のこと、いかに苦労されたかとお察ししつつ、それだけに喜びもひとしおだろうと思いました。赤ちゃんの展示初日にプールに落ちたことは、新聞で知っていました。

根本　進さん
（漫画家）

猛獣と言えば、ライオン、トラ、クマ類など頭蓋骨が似ているものが上げられますが、私は偶然にドイツのケルン動物園を見物した時、ライオンが子供を産んで、今日はじめて産室から出すという所を見ました。まずオスのライオンが再会できた嬉しさを全身に現わしてメスのライオンに近づくと、意外にもこどもを従えた母親はものすごい咆哮と共に一撃を加えんばかりの姿勢でオスのライオンを近寄らせませんでした。

そんな光景のスキに赤ちゃんライオンの1頭が池に映る自分の姿に気をとられて、水辺に近づいたと思ったらボチャン！　と転落、たちまちアップ、アップ。

どうなることかと係員もお客もハラハラしていると、母親ライオンもこれに驚いたらしく、飛んで来て赤ちゃんをくわえようとしますが、赤ん坊が前向き姿ではなかなかくわえにくく、大慌てに慌てていました。少し横にまわって赤ん坊の首をくわえようとしていましたが、くわえかけると沈むので捕まえられません。遂に意を決した彼女は両前肢を開いて池の端に前身を低くふんばり、もう一度赤ん坊の首を横から噛む姿勢を取りました。浮き沈みしていた赤ん坊の姿が一瞬私達の視界から消えて母親ライオンの顔が水面から20cmぐらい潜ったと思った頃、今度はしっかりと赤ん坊をくわえたらしく、水に濡れた母親と赤ん坊の顔がやっと池から出てきました。これで飼育係も、観客もやっと一斉に拍手して、胸をなでおろしました。

天王寺動物園のホッキョクグマの赤ちゃんがプールに落ちたときも、きっとこんなふうだったのでしょう。

動物園という安全圏にも、こんなハプニングがあるのか…と思ったものです。

天王寺動物園でのハプニングは、こんな珍しい光景をのがさずシャッターをきった人がよくいたものだと、写真を何度も見なおして、私は改めて感心しています。

（ねもと　すすむ）

コアラが入園しました　フクロネズミ目　コアラ科

6月9日、兵庫県淡路ファームパークからオスの“康（コウ）”が入園しました。これは近親交配を防ぐためで、平成3年に当園で生まれた“ミク”が同日、淡路へ向け出発しました。

アフリカで考えたこと

本間令香（大阪動物園ボランティアーズ会員）

私がアフリカへ行こうと決心したのは、もう7～8年前になるでしょうか。アフリカのルワンダでマウンテンゴリラの研究をされていた女性研究者である今は亡きダイアン・フォッシー博士をモデルにした映画「愛は霧のかなたに」を見たときのことでした。その後、具体的にアフリカやゴリラのことを調べ、昨年、ケニアを中心にほぼ1年間アフリカで生活する機会を得ました。

アフリカのことを思い出すときにまず浮かんでくるのは、周囲360度に広がったサバンナの地平線とアフリカの人達の笑顔です。最近はケニアにも観光客が増え、特に日本人の増加には、目を見張るものがあります。現地のガイドの中にも日本語を話せる人が増えています。私もケニアで日本人観光客のガイドとして少しの期間働いたことがありますが、多くの日本人とサバンナでくりひろげられる様々なドラマを見ることができました。日本では地球の環境破壊に対する関心が高まってきて、話題になることも多くなりました。しかし、アフリカでは日本でよく言われる“地球にやさしく”というのを感じる余裕はありませんでした。

アフリカの自然のなかにいると、絶対的な強さというものは存在しないような気がします。一般的にはライオンは“百獣の王”としてサバンナに住む動物のなかで一番強いと思われていますが、サバンナで動物たちを見ていると、本当に強いのは草食動物ではないかと思えてきます。ライオンは獲物をとるために長い間待ち伏せし、やっとチャンスが到来し獲物に飛びかかったとしても失敗することがよくあります。それにひきかえ、草食動物の方は草のある所へ移動さえできれば、草は逃げないので食物に困ることはありません。生きていくためには、案外、肉食動物のほうが大変なのかもしれません。食べられる動物より、食べる動物の方が数が少ない。つまり、食物連鎖のより上位にある動物ほど数が少ないということを実感できました。

シマウマを食べるライオン（ケニア、マサイ・マラ動物保護区）

少し話は変りますが、初めて野生のライオンを見た時、感動と同時にとてもびっくりしたことを覚えています。それまで見たどこの動物園のライオンも汚くて元気がなく、だらしがないというイメージがつきまとっていましたが、サバンナで見るライオンは美しくて、風格があり、自分の種を守っていくという威厳を供えており、まさに“百獣の王”といえるものでした。もっとも動物園とはちがって野生は厳しく、少しでも不健康な動物は生きていけないのですから、野生の動物は健康で美しいのは当然のことなのかもしれません。

私は小学生のころから動物園の飼育係になりたくて、専門学校に入り動物の飼育のことを勉強しましたが、アフリカの動物たちを見て、最近では日本の動物園の飼育というものに疑問を持ちはじめました。動物園を否定するわけではありませんが、それぞれの動物の住んでいる環境、食性、性質などをもっと考慮して、少しでも野生に近い環境を再現してやらなければならないのではないでしょうか。動物は言葉を話せませんので、もしかすると、餌が十分あり、外敵もいない動物園のほうが幸せと思っているかもしれませんが。

何回もサファリに出て、一番印象に残っている動物は、たった1度だけ見たサーバルキャットです。めったに見られない動物ですが、ケニアのマサイ・マラ動物保護区で出会った時はただうれしくて写真を撮るのも忘れてしまったほどでした。

ガイドをしていて、観光客の皆さんが目をキラキラ光らせて動物を見ている姿を見ると、こちらまでうれしくなり、「人間まだ、すてたものではないなあ」と感じたものでした。しかし、観光客が多くなればなるほど、サバンナの植生は破壊され、動物たちに悪影響を与えることを考えると複雑な気持ちにはなるのですが。一番良いのは本来の自然がそのまま保たれることなのですが、今、東アフリカのほとんどの国立公園では境界線のぎりぎりまで開発の波が押し寄せています。ルワンダのゴリラが住む山などがその例で、山のふもとどころか、中腹近くまで畑になっています。でも、住民に責任があるわけではありません。彼らは生活するのがやっとで、動物のことまで考える余裕はありません。誰だって明日の食事の方が野生動物のことより大切なのですから。国立公園を維持していくためには莫大なお金が必要です。いくら観光客が増えたとしても、入園料だけでは維持していくことはできません。文明生活をおくっている国の人々が“自然を守れ”、“動物を保護しろ”と叫んでいるだけでは、少々身勝手ではないかと思います。アフリカ人が彼らの生活を第1に考えるのは当然のことなのですから。

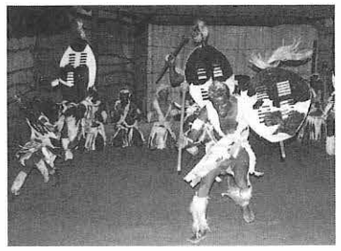
雨にぬれたオス（シルバーバック）のマウンテンゴリラ（ウガンダにて）

サバンナで大きな群をつくるオグロヌー（ケニア、マサイ・マラ動物保護区）

しかし、アフリカの人達は本当に根から陽気だなあとつくずく感じました。“明日は明日の風が吹く”という言葉はまさに彼らのためにあるように思われます。アフリカで生活を始めた当初は、アフリカ人の「ダメでモトモト」と言う考え方に腹を立てたことが何度もありました。日本人の常識は日本でしか通用しないものと分っていても、なかなか彼らの考え方にはついていけませんでしたが、今ではかわし方もずいぶんうまくなりました。しかし、アフリカ人の笑顔には心ひかれるものがあります。“笑う”ということはこういうことなんだと初めて分りました。日本人というものは“笑う”ことのへたな民族であることをつくずく思い知らされました。いやなことがあった時、彼らの笑顔に何度も励まされたものでした。もう1つ、腹をたてさせられたのは彼等の時間観念でした。すべての人がそうではないのですが、アフリカ人は基本的に“Pole Pole”（スワヒリ語でゆっくりの意味）です。アフリカ人の友人と待ち合わせをしても、まあ時間どおりに来たことはありません。私も日本ではかなりの“遅刻魔”ですが、彼らはそれを上回るものでした。友人のザイール人いわく「2時は2時59分まで2時だ。」ということです。反対に、遅刻したことを怒っている私の方が変だと言われるのですから、まったく国がかわれば、常識も変るものです。日本に帰ってみて、日本人は時計に追われて生活していると思われてしかたがありませんでした。サファリに出てもほんとうに時間がゆっくりと進んでいきます。日本人にとってのんびり時間をすごすことは最高のぜいたくかもしれません。

私のアフリカ生活にとって、最高のぜいたくは動物を見に行くことでした。雄大な大地と空の中で聞こえるのは自然の音楽だけ。ナイロビという都会に住んでいて、時々はこうして大自然の中に身を置くことのできる私は世界で1番幸せではないだろうか思ったほどでした。「自然は神、野生は友」という言葉がありますが、まさにそのとおりだと思います。

もう1つのアフリカの魅力は音楽です。アフリカ人にとって音楽は生活に密着していて、音楽という言葉を改めて使う必要がないほど、彼らにとって音楽は日常生活の一部になっています。神を讃える歌、恋人に捧げる歌、収穫の喜びの歌、子供の誕生を祝う歌など生活に根づいたいろいろな歌があります。ケニアだけでも60近い部族が住んでおり、部族ごとに習慣や考え方が異なるので、歌ももちろん違います。しかし、今ではナイロビのディスコなどでは現代音楽が中心で伝統的な音楽に触れる機会は多くはありません。しかし、ザイールが発祥のリンガラという音楽はアフリカの多くの国々の人々に愛されているようです。リンガラに合せて踊るアフリカ人の踊りのリズム感は天性のもので、日本人にはまねのできるものではありません。



ジンバブエのベンバ族の踊り

踊りといえば、野生動物にもすばらしいダンサーがいます。それはダチョウですが、彼らの求愛ダンスは壮大かつ美しいものです。オスのダチョウは繁殖期になると首や足の赤い色がより鮮やかになり、メスの前にうずくまり、翼を広げ、左右に揺り動かす求愛ダンスはとてもみごとです。一見の価値はあるでしょう。

野生動物を見ていると、親子のきずなや生きる厳しさなど、教えられることが多くあります。彼らは自分の種を残すために最大限の努力をしています。しかし、自然は厳しく、生きぬくのはとても大変です。特に水の確保は最も重要です。日本ではなかなか理解できないことなのですが、アフリカでは水の確保は人間にとっても大きな問題です。特に最近では雨季にあまり雨が降らないので、問題は深刻です。ナイロビの高級ホテルでは水もお湯も当たり前のように出ますが、ナイロビで家を捜すときにまず見るのは、常に水があるかどうかです。日本ではとうてい考えられないことなのですが、アフリカ生活に慣れた私はおかげさまでバケツ1杯の水で体を洗えるようになりました。しかし、動物にとって水の確保は死活問題です。動物たちは水を求め多くの危険があるにもかかわらず大移動をします。水の豊かな国、日本では考えられないことかもしれませんが、「水を大切にしましょう」と大きな声をあげたい気持ちになります。

あまりにも、いろいろなことがあったので、詳しいことは述べられませんでしたが、私の結論は「アフリカはすばらしいところだ。」いうことです。とりあえず、1度アフリカの大地を自分の足で踏みしめることを皆さんにお勧めします。

（ほんま　れいか）

鳥の楽園(バードケージ)における過去7年間の繁殖成績

“鳥の楽園”は1987年8月にオープンした当園としては初めて観客が動物舎の中に入って直接動物を見ることのできる通り抜け方式の鳥類舎で、オープン以来好評を博している動物舎です。当初、約50種、250羽での鳥類で飼育展示を始めました。その後、雑居飼育にもかかわらず毎年順調に繁殖し7年間で孵化数は870羽、生育数も521羽にのぼっています。私が“鳥の楽園”の担当をしたのは1993年から今年の5月までのわずか1年間だけですが、私が担当する以前の記録も合せて過去7年間の繁殖成績についてお話ししたいと思います。

“鳥の楽園”では1991年3月31日現在、ペリカン目のカワウが3羽、シュバシコウを始めクロトキ、アフリカヘラサギ、アオサギなどコウノトリ目の鳥が10種 101羽、マガン、メジロガモ、ミコアイサなどカモ目の鳥が41種 255羽、ウミネコ、ユリカモメなどチドリ目の鳥が3種13羽、合計55種、372羽の水鳥を飼育しています。

1987年は、わずか16卵しか産卵していませんが、これは、“鳥の楽園”の完成が繁殖期の終わった7月となり鳥を移したのが7月の末になったためです。しかし、アカハシリュウキュウガモが7羽自然ふ化し2羽が成育しており、“鳥の楽園”での繁殖第1号となりまた日本の動物園で初めて繁殖に成功したものであったので、(社)日本動物園水族館協会の繁殖賞(自然繁殖の部)を受賞しました。

“鳥の楽園”での繁殖第1号の
アカハシリュウキュウガモの親子

1988年は本格的な繁殖が始まった年で、4月上旬からアオサギ、シュバシコウ、コサギ、カナダガンなどが次々繁殖し始めました。シュバシコウは人工の木に新しく設置した巣台でうまく繁殖してくれるか心配でしたが、繁殖成績は過去最高で6巣で12羽がふ化し、10羽が成育しました。ガンやカモ類の繁殖も順調で12種 119羽がふ化し82羽が成育しています。とりわけ、メジロガモ、クビワコガモの繁殖は日本の動物園ではおそらく初めてと思われましたが、残念なことに成育しませんでした。

シュバシコウの巣とヒナ

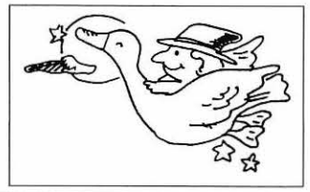
1989年は鳥たちが環境に慣れたのか産卵数は前年度の2倍以上の532卵にのぼりました。ハワイガンが当園では初めて1羽ふ化しましたが、残念ながら2か月ほどで死亡しました。メジロガモは2羽が成育し繁殖賞を受賞しました。また、繁殖が難しいといわれている魚食のアイサ類のオウギアイサも初めて1羽成育しています。

1989年から1992年までの4年間は産卵数が500卵を越えており、目立った繁殖動物はないものの、かなり鳥たちが環境になれてきたようで、産卵する鳥が決まってきたよう思われます。また、オープン時に新しく導入した若い鳥たちが繁殖可能になったことがうかがえます。

1993年の繁殖成績はそれまでの4年間と比べて悪いですが、これはこの年にカモ類にボツリヌス症という伝染病が発生し多くのカモたちが死亡したことがかなり影響していると思われます。

私は“鳥の楽園”の担当は離れましたが、これからも“鳥の楽園”の鳥たちの繁殖を見守っていきたいと思っています。

(飼育課:村上 勇一)



鳥の楽園における繁殖成績一覧

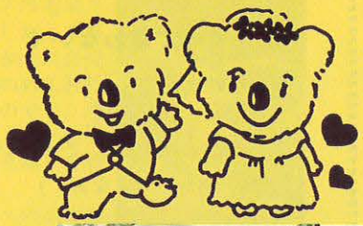
種名	1987 産卵	1987 有精	1987 孵化	1987 成育	1988 産卵	1988 有精	1988 孵化	1988 成育	1989 産卵	1989 有精	1989 孵化	1989 成育	1990 産卵	1990 有精	1990 孵化	1990 成育	1991 産卵	1991 有精	1991 孵化	1991 成育	1992 産卵	1992 有精	1992 孵化	1992 成育	1993 産卵	1993 有精	1993 孵化	1993 成育	成育合計
シュバシコウ ◎					*52	≧12	12	10	*48	≧10	10	6	*52	≧6	6	5	*56	≧6	6	5	*48	≧9	9	7	*48	≧9	9	9	42
アオサギ ◎					*12	≧3	3	1	*12	≧3	3	2	*4	≧1	1	1	*16	≧10	≧10	10	*8				*4				14
コサギ					*12	≧5	5	4	*20	≧1	1	0	*32	≧14	14	13	*48	≧15	≧15	15	*48	≧19	19	16	*20	≧2	2	0	48
シュモクドリ					*12	≧5	5	5	*4																				5
クロトキ×ベニヘラサギ																									11	1	1	0	0
ウミネコ ◎					2	1	1	0	1	0	0	0									2	0	0	0					0
カワウ													8	0	0	0									2	0	0	0	0
ハワイガン									1	1	1	0	5	5	4	4	1	1	1	1	12	0	0	0					5
カナダガン					8	7	7	6	7	7	7	3	6	3	1	1	6	5	4	3					10	3	2	1	14
ハクガン					1	1	1	0	4	4	4	4	2	0	0	0									4	0	0	0	4
インドガン ◎					2	2	2	0	1	0	0	0	4	0	0	0	2	2	0	0									0
マゼランガン									4	0	0	0	2	0	0	0													0
ロウバシガン																	1	0	0	0									0
カナダガン×インドガン																					5	0	0	0					0
オシドリ					26	24	24	13	100	63	16	14	196	89	39	23	291	172	90	47	378	165	97	58	331	177	107	49	204
カルガモ					7	7	7	6	17	14	14	13	6	5	5	4	8	8	6	6					16	13	10	9	38
アカアシコガモ ◎					15	8	8	3	81	26	9	6	9	3	3	0													9
アカハシハジロ ◎					34	34	27	9	82	50	24	9	106	62	41	16	84	55	45	25									59
キンクロハジロ ◎					4	4	4	3	6	5	4	3																	6
ツクシガモ					3	3	2	2	16	15	9	8	21	9	6	5	18	13	0	0	15	8	5	0	23	8	5	3	18
ネズミガシラ アカツクシガモ×アカツクシガモ													3	3	3	3													3
メジロガモ ●					1	1	1	0	10	8	3	2	11	7	5	3	4	4	3	1									6
クビワコガモ					1	1	1	0	3	1	1	0	6	1	1	0	6	1	1	0									0
アカハシリュウキュウガモ ●	16	10	10	5	18	15	15	8	106	53	24	19	30	7	2	1	76	54	14	5	10	3	0	0	9	1	0	0	38
オウギアイサ									9	9	3	1									1	1	1	0	4	3	3	0	1
合計	16	10	10	5	210	133	125	70	532	270	133	90	505	208	131	79	618	346	201	118	527	205	131	81	482	217	139	71	514

◎:繁殖賞受賞(バードゲージ移動前) ●:繁殖賞受賞(バードゲージ移動後)
*は推定産卵数(営巣数に平均産卵数である4個をかけたもの)

なきごえ30(8).1994

グラフZOO

コアラのムコ入り



淡路ファームパークコアラ館の内部
（撮影：淡路ファームパーク）

6月9日、兵庫県淡路ファームパークより、ビクトリアコアラの“康（コウ）”君が来園し、当園の“ミク”がムコ入りしました。

（撮影：大野　尊信）

特別列車に乗ってムコ入りです。

はじめまして**康**です。

ミク君のお嫁さんになる
幸ちゃんと**福**ちゃん
撮影：淡路ファームパーク

ムコ入りした**ミク**

♥♥♥ お嫁さん ♥♥♥

お嫁さんの**ミドリ**

お嫁さんの**ハナ**

キーパーズアイ

驚かせてゴメンナサイ

夜行性動物舎の中はまっ暗ですから、入園者のはなしを立聞きすることができます。
おかげで、入園者が動物や展示をどのように見ているかを知ることができるようになりました。

それはいいのですが、ガラスをたたく人や動物を捜している人に声をかける時には困ります。暗闇の中で、いきなり「ガラスを、たたかないでくださいね」とか「ここに、いますよ。」なんて言われると、ほとんどの人はジロッと振向き、そそくさとその場を離れていきます。

きっと、「変な人に話しかけられた。」と思うんでしょうね。まあ、その気持ちはよくわかります。この場をかりて謝っておきます。ゴメンナサイ。少しは反省して、最近では動物を捜している人がいれば、なにげなく近寄って「あっ、こんな所におるわ。」と、ひとり言のように言うようにしています。それが、きっかけで動物の説明なんかもすることがあります。それでも、こっちが飼育係だと気付く人はあまりいません。

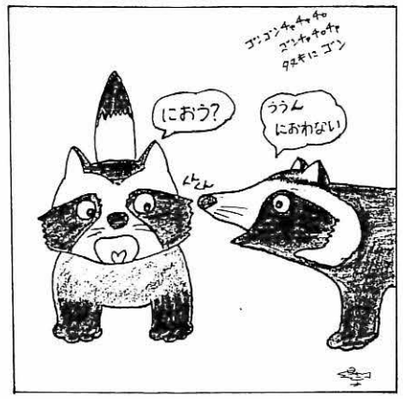
いつか「動物のことを、よくご存じですね～」と言われたら、こう言おうと考えています。
「いや～、わたしココのもんでんねん。」
京都の食堂CMにあやかって真似しようと思ってはいるんですが……

（飼育係：早川　篤）

クサ～イって言わないで

夜行性動物舎に入ってしばらく進んでいくと、フクロギツネがいます。
ここで立止まった人は、だいたいが
「うっ、何かクサイなぁ。」
と言うのです。
フクロギツネが、くさいのではありません。
そこには作業用の扉があり、中にいる動物たちのにおいが、全部そこから観覧通路にもれているせいなのです。

でもね、昼に生活する人間が目と耳などの働きによって、いろんな状況判断をするのにたいして、夜に生きる動物は「におい」によって情報を伝えあっているんですよ。



種により、様々なにおい物質をもっているのですから、においも動物の一部なんです。

親子で動物を見ていると、子供は親と同じ反応をしているな、と感じることがよくあります。お母さんが「くさい」と言うと子供も同じように「くさい」と言っています。

僕は、都市生活で自然と離れて暮らす子供たちに動物をとおして自然と触れ合ってもらいたいと思っています。

動物はカワイイだけではなく、においもあれば、ウンチもする。それが、動物なんだと感じてほしいと思っています。

だから、大人の方は多少クサくても、子供には、
「あっ、これは動物のにおいだ！」
と教えてくれないかな、な～んて思うのですがネ。

（飼育係：早川　篤）

6月1日　ヒツジの毛刈りを行いました。これは人の衣がえに合せて毎年この日に行っているものです。今年はオス、メス合せて8頭の毛刈りを行いました。

当園のメスのニホンコウノトリと豊岡コウノトリ保護増殖センターのオスを交換しました。

6／ 2. コンゴインコが2羽ふ化しました。当園では初めての繁殖です。

6／ 3. ミヤマハッカンが3羽ふ化しました。

6／ 6. ニホンザル、ニホンジカがそれぞれ1頭生まれました。
ヒクイドリが今季4卵目を産卵したので、人工ふ化させるため、ふ卵器に入れました。

6／ 9. ビクトリアコアラの繁殖を推進するため、当園生まれのオス“ミク”と淡路ファームパークのオス“康(コウ)”を交換（ブリーディングローン）しました。

6／11. 5月12日に保護したオオミズナギドリを自然復帰させました。

6月12日　昨年11月27日に生まれたホッキョクグマの赤ちゃんの命名式を行いました。

愛称を公募していましたが、応募総数18,000通の中から、もっとも多かった（1,512通）“ゆきみ”に決まりました。
タヌキの赤ちゃんを3頭保護しました。

6月14日　4月20日に生まれたクロサイの赤ちゃん“サトミ”を一般公開しました。前日の報道公開でかわいい赤ちゃんの姿がテレビなどで伝えられていたので、さっそく人気を集めていました。

4月8日保護したアオサギなど6種9羽を自然復帰させました。
サバンナモンキーが1頭生まれました。

6／15. 警察からグリーンイグアナを1頭保護預りしました。

6／19. カナダヅルが1羽ふ化しました。ふ化日数は33日でした。

6／20. オランウータンの“ブル”の定期健康診断を行いました。
ニホンザルの赤ちゃんを1頭保護しました。

今月もおもしろ情報満載 ZOO DIARY

6／21. 今季初めてレアが1羽ふ化しました。ふ化日数は40日でした。

6月23日　（社）大阪市天王寺動物園協会の平成6年度総会が開催され、西尾会長のあいさつ（佐々木副会長代読）の後、各議案について審議され、原案どおり満場一致で承認されました。

また、理事に佐々木建設局長の後任として宮崎建設局花と緑の推進本部長、カネボウ食品大阪販売（株）坂田理事の後任に高間カネボウフーズ冷凍統括部長の就任が承認されました。

6／26. 5月25日と6月6日に保護したメジロを自然復帰させました。
4月25日に産卵し、人工ふ化を試みていたヒクイドリの卵を検卵しましたが残念ながら無精卵でした。

6月27日　今年“鳥の楽園”でふ化したシュバシコウのヒナ4羽に個体識別のため脚帯と翼帯をつけました。擬木の上にある巣まで登って作業を行いましたが、ヒナは巣立ち間近だったので、1羽が巣から飛び降りてしまいました。

オランウータンの“サブ”と“モモコ”の定期健康診断を行いました。

6／29. 警察からギンギツネを1頭保護預りしました。

6／30. アブラコウモリを1頭保護しました。

■お知らせ■

●動物園のおじさんのお話
「ゾウのふれあいガイド」
日時：8月21日(日) 午後1時から
場所：ゾウ舎前

●テレフォンサービス　06－771－9999

愛ある暮し、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS

生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B５変型判・オールカラー
定価680円

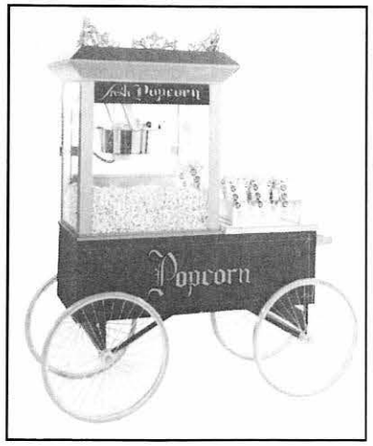
動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ＜既刊本＞
B5変型判・オールカラー・各定価680円

むし くらしとかいかた
野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

ちいさないきもの くらしとかいかた
昆虫以外の小さな生き物を320種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表



マスダのポップコーン

マスダ　いつでも どこでも ポン ポン ポン

〈営業品目〉　製造機械・保温機　他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

㈱増田食品　〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30
TEL (06)865－0165

オートフォーカスカメラに

フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフイルムです

カメラの大林
桜橋本店　☎341－8091
阪急三番街店　☎372－5031
OHVAC店（ギャレ大阪）　☎346－7606

動物の生態を描く唯一の文学雑誌

動物文學

昭和九年平岩米吉によって創刊

本誌は生態研究を基礎として動物文献を収集整理するとともに、シートン、ザルテン、バイコフ等の諸作家を紹介した本邦動物文学の母胎です。
〈研究・考証・記録・随筆・翻訳等を掲載〉
会費／年1,500円（切手72円・呈既刊号目次）

動物文学会
〒152 東京都目黒区自由が丘3-12-2　電話03(3717)1659・振替・東京5-9800

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分（10本常備）

天王寺動物園の本

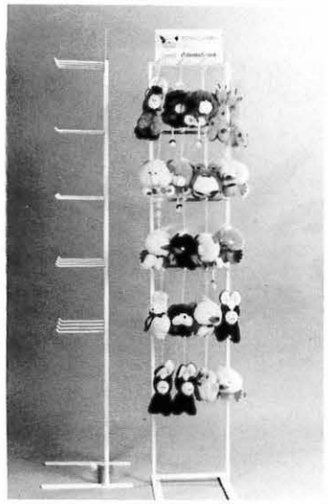
入園の記念・手引に……

- 対　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間／10日間
- 貸出料／無料（但し郵送料510円は必要）
- 申込先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

オールカラー
500円
園内売店にあります。

コアラテレホンカード（限定販売）
好評発売中　¥800（50度用）

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

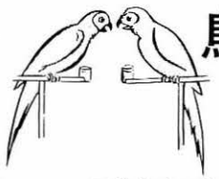


動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

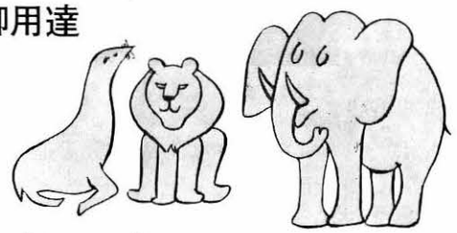
有限会社 **アニメランド**

〒547 大阪市平野区西脇４丁目５番22号
TEL：(06)704－８５８０
FAX：(06)704－８５６５



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



・医学実験用動物
・宣伝用、テレビ用、貸動物
・原色世界雑類図鑑（34種1枚もの）要郵便券250円

有限会社 **吉 川 商 会**

本　社　神戸市中央区中山手通３丁目11番４号　電話(078)221-8195(代)
飼育場　兵庫県小野市来住町１５１３番地

たのしい〝動物のお話〟は、ガイドマシン（動物説明機）で、どうぞ!!

園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回　20円

動物園内での お食事、ご休憩は

動物園内……
中央売店
TEL 06-771-0973

お食事・飲もの・おみやげ　動物園内 **南園売店** TEL 06-771-7110

思いやり、ほんの少し、コアラのために。

多くの思いやりが、ひとつになって、オーストラリア・コアラ基金を応援します。

多くの人に支えられて育ってきたコアラのマーチ。
一方、コアラのふるさとオーストラリアでは、シドニー近郊の山火事などにより、コアラたちの安住の地が年々少なくなってきています。
そこで、ロッテでは、コアラのマーチ誕生10年を記念するキャンペーンを実施するとともに、
コアラを取りまく環境を守ろうと、オーストラリア・コアラ基金（1986年設立）のゴールドスポンサーになりました。
コアラのマーチを支えてくれる皆様の思いやりがひとつになって、オーストラリア・コアラ基金を応援いたします。

LOTTE

なきごえ　1994年８月10日発行（毎月10日発行）第30巻　第８号　（通巻348号）

編　集／大阪市天王寺動植物公園事務所　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6―74
発行人／大阪市天王寺動物園協会　土井良彦　電話 大阪 (06) 771―0201
印刷所／株式会社 松村善進堂　定価150円(送料共)　１年継続(12部) 1,650円(送料共)　振替口座　大阪３―３７８２３

編集委員　中山良三郎／岩倉善樹／増野悦敏／樽本　勲／中川哲男／山根和弘／吉本昌俊／谷森　進／宮下　実／長瀬健二郎／榊原安昭／森本委利／中上正幸／堀内智生／小林崇宏／竹田正人／大野尊信／野口秀高／早川　篤／土谷正道／村上勇一／仁田原洋